

# TEAM LAND CRUISER TOYOTA AUTO BODY

ダカールラリー 2016  
参戦報告書

## 史上に残る戦い! 市販車部門3連覇達成!

チームワークでつかんだ逆転勝利と初の社員ドライバー完走

kar.com

Argentina



#Dakar2016

Bolivia  
te espera



トヨタ車体株式会社  
チームランドクルーザー・トヨタオートボデー





# 新たなチャレンジで 波乱の戦いを制す

開催地をアフリカから南米に移して8回目の今大会  
チームはさらなる高みをめざして、新たな一歩を踏み出した  
3連覇に向かって邁進し、市販車部門トップに立ったが  
アクシデントで優勝が危ぶまれる苦しい状況に追い込まれた  
しかし、新たなチーム、新たなチームワークがそれを跳ね返した

トヨタ車体のラリーチーム、チームランドクルーザー・トヨタオートボデー(TLC)は、アルゼンチン／ボリビアで開催されたタカールラリー2016の市販車部門にランドクルーザー200シリーズで参戦。トラブルやアクシデントをチームワークで乗り越え、同部門の3連覇を果たすとともに初挑戦の社員ドライバーも無事完走を果たした。

トヨタ車体創立70周年の節目に、TLCは①新たなチームで挑むことを決定。エースのニコラ・ジボンは新ナビゲーターにベテランのジャン・ピエール・ギャルサンを迎えた。②前回までジボンのナビを務めた三浦昂(トヨタ車体社員)をドライバーとして採用し、ナビは経験豊富なローラン・リントロイシター。ラリー車開発を専属で担当する社員エンジニアとして伊東克巳が加わり、社員を起用しての挑戦を打ち出した。この新体制で③自己の持つ最高記録更新となる6連覇に向け、今回3連覇に挑戦する。この3つのチャレンジを新たなテーマに掲げた。

今大会はアルゼンチンの首都ブエノスアイレスを1月2日にスタート。ボリビアのウユニを経由して16日にアルゼンチンのロサリオにゴールする全行程9596km(競技区間(S)4775km)で行われた。

順調な滑り出しで6日に部門首位に浮上した343号車(ジボン／ギャルサン組)だったが、8日にはウユニのループ競技区間で溝に落ちて自走不能に。追いついた342号車(三浦／リントロイシター組)がその後の160kmを牽引してゴールしたことでリタイアは免れたが、順位は部門首位から1時間38分差の4位に後退した。

車両が修復されると343号車は気迫の追撃を開始。砂丘やパウダーサンドのフェシユフェシユが連続する後半戦の難コースで連日トップと30分以上タイムを縮めると、最大の難所となった13日のフィアンバラ砂漠で再び





## トヨタ自動車 豊田章男社長からお祝いのコメントをいただきました

トヨタ車体「チームランドクルーザー・トヨタオートボデー」が、市販車部門で3年連続の優勝を果たしたことを、大変うれしく思います。これも、応援をいただきました皆さまのお蔭であり、心より感謝申し上げます。

ラリー前半戦、343号車がクラッシュした場面がありました。自走不可となった343号車を、342号車が牽引してゴールにたどり着き、メカニック達は明け方までかかって車を修復し、チームみんなの力で2台共がラリーを継続することができました。

「なんとしても全員でゴールを目指す！」という関係者全員の熱い想いがひとつとなって達成したのが、今回の優勝であり、三連覇であると感じています。

心をひとつに、総走行距離8000km超の過酷な道を走り抜いたドライバー、ナ



ビ、それを支えたメカニック、そして、過酷な南米大陸の道をも走破する「ランドクルーザー」を開発した全ての関係者の方々に敬意を表するとともに、心からの感謝の意を表したいと思います。本当におめでとうございます。

心をひとつに走り抜いた長い道のりの中でランドクルーザーというクルマは更

に鍛えられ、過酷な環境の下での挑戦の日々に、携わったメンバーは大いなる成長を遂げたことと思います。

完走を果たした342号車のドライバーの三浦さんはトヨタ車体の社員の方です。社内公募でダカールラリーのプロジェクトに自ら手を挙げ、何年にも亘る厳しいトレーニングやナビゲーターの経験を経て今回、完走を果たしました。三浦さんのチャレンジ精神と経験は、必ずやトヨタ車体の、そしてトヨタグループ全体の「もっといいクルマづくり」に良い刺激となって表れていくと思います。

「道が人を鍛える。人がクルマをつくる。」その想いを胸に、どんな時も不撓不屈の精神で、トヨタグループ一丸となって「もっといいクルマづくり」にこれからも取り組んでいきたいと思ひます。応援ありがとうございました。

参加台数と完走台数					
	部門	クラス	参加台数	完走台数	完走率
4輪	市販車 (量産車にロールオーバー・大容量燃料タンクなどの「安全に走る」ための装備を追加した車。主要部品の交換が禁止されている)	ガソリン	1	0	0%
		ディーゼル	10	6	60%
			11	6	55%
		改造車	100	60	60%
	小計		111	66	59%
	2輪		136	84	62%
	クアッド(4輪バギー)		45	23	51%
	カミオン(トラック)		55	41	75%
	合計		347	220	63%

チームランドクルーザー累計順位推移			
ラリー日程		No.343 ジボン/ギャルサン 市販車部門優勝	No.342 三浦/リントロイスター 市販車部門5位
		順位	順位
12月31日(木)	車検 TECHNICAL CHECK	—	—
1月2日(土)	START CEREMONY *1	11(110)	2(50)
1月3日(日)	STAGE 01 *2	—	—
1月4日(月)	STAGE 02	6(59)	5(58)
1月5日(火)	STAGE 03	2(49)	6(55)
1月6日(水)	STAGE 04	1(44)	5(53)
1月7日(木)	STAGE 05	1(35)	4(46)
1月8日(金)	STAGE 06	4(47)	6(53)
1月9日(土)	STAGE 07	4(44)	6(48)
1月10日(日)	休息日 REST DAY	—	—
1月11日(月)	STAGE 08	3(39)	6(50)
1月12日(火)	STAGE 09	3(34)	5(43)
1月13日(水)	STAGE 10	1(31)	5(49)
1月14日(木)	STAGE 11	1(33)	5(51)
1月15日(金)	STAGE 12	1(33)	5(50)
1月16日(土)	STAGE 13	1(32)	5(48)

順位は市販部門、( )内は総合順位

\*1 スタート順位を決めるプロローグランはアクシデントにより中止

\*2 悪天候により競技中止

首位に浮上した。ライバルの後退もあって2位に57分52秒の差をつけたが、翌14日に前走車を追い抜く際に岩にヒットして転倒。2位との差は僅か21分09秒に縮まった。夕方ビバーク(車両整備場)に到着した車両はそのままで競技を続けられないほどのダメージを負っていたが、ランドクルーザーの堅牢性の高さ、チームメンバー全員による懸命の作業で翌日のスタート30分前までになんとか修復。残り2日間を集中して走り切った343号車は2位に43分49秒差をつけて優勝し、チームは総合力で3連覇を達成した。一方、342号車は岩で駆動系を破損するトラブルなど波乱もあったが、冷静に対処し完走率59%(4輪)の今大会を部門5位でフィニッシュ。チーム全員のあきらめない気持ちで素晴らしい結果を勝ち取った。



## トヨタ車体 取締役社長 岩瀬 隆広

新たなチームでチャレンジし、3連覇を達成することができたことを大変うれしく思います。応援していただいたファンの皆様や、ご支援いただいたスポンサーや関係者の皆様に感謝申し上げますとともに、3連覇に向けて心ひとつに全力で挑んだチームメンバーにも感謝します。

世界で最も過酷なラリーと言われているダカールラリーで3年続けて勝利できたことにより、ランドクルーザー200シリーズの走破性や安全性、信頼性を実証することができました。今後もラリーで得られた成果を「もっといいランドクルーザーづくり」に活かして、世界中のお客様に喜んでいただけるクルマづくりを一層進めて参ります。今後も引き続きご声援をお願いいたします。



# 12/31

## 車検

レーシングスーツなど、装備品のチェックを受けるジボンドライバー。



### 車検を通過しスタートに向け準備万端

ダカールラリー2016の最初の日程となる車両検査が、アルゼンチンのブエノスアイレスで始まった。車両はフランスから船で運ぶ前に事前チェックを受けており、検査は順調に進行。2時間程度で終わり、車両保管場に入った車両は1月2日のスタートまで、競技の開始を待つだけとなった。



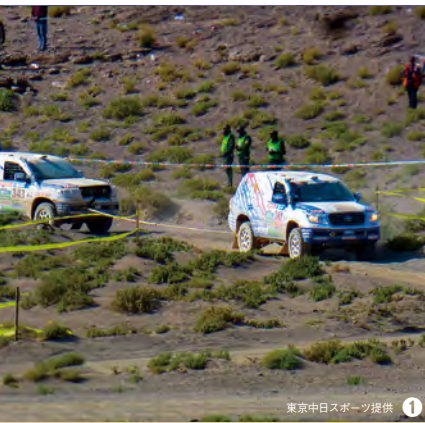
日本から駆けつけたトヨタ車体唐澤敬常務役員、米澤公博常務役員がチームを激励。



## DAKAR RALLY 2016

# 激闘 15日間の 記録

標高4700mにおよぶ山岳地帯  
最長500kmを超えるSS(競技区間)  
南米でのダカールラリーで  
最長となる砂丘セクションなど  
今大会も厳しいコースが待ち受けた



①アクシデントに見舞われるも、2台のチームワークで無事にゴールに辿り着いた。②牽引した343号車の状況を報告する三浦ドライバー。③342号車は前半戦を市販車部門6位で折り返した。

東京中日スポーツ提供 1



# 1/2

## スタートセレモニー ブエノスアイレス

### ダカールラリー2016がスタート

競技の開始となるスタートセレモニーが行われ、午後2時半ごろTLCは登場。多くの観客に見送られ、スタートした。この日はブエノスアイレスから171km移動後に、翌日のスタート順を決める短い競技が予定されていたが、事故が発生したため途中で中止に。TLCの2台はロサリオ市郊外のビパークに到着し、翌日に向け整備を行った。

スタートボディウムで観客の声援に手を振って応える三浦ドライバーとリシトロイスターナビ。



# 1/3-5

- 第1ステージ ブエノスアイレス→ヴィラ・カルロス・パス 走行距離662km
- 第2ステージ ヴィラ・カルロス・パス→テルマス・リオ・オンド 走行距離858km
- 第3ステージ テルマス・リオ・オンド→フファイ 走行距離663km

### 雨にたたられた序盤戦は慎重な出だし



本格的競技の初日は悪天候で競技が中止となる波乱の幕開け。翌日は競技を実施したが、雨による安全面を確保するために競技区間が短縮され、343号車がトップと30分差の部門5位、342号車が6位で終えた。第3ステージも雨の影響を受け、再び距離を短縮。そんな中、343号車は部門2位と順位を上げ、342号車も5位でポジションをキープした。

一部はひどい泥濘路でマシンが泥だけになることも。2台とも慎重に走った。

# 1/6-7

- 第4ステージ フファイ→フファイ 走行距離629km
- 第5ステージ フファイ→ウユニ 走行距離642km

### 343号車が待望の市販車部門トップに立つ!

ボリビア国境付近の山間地を舞台とした第4ステージは、最高標高4000m超の高地。このステージを市販車部門1位でゴールした343号車が累計でもトップに浮上。翌日はさらに標高4700mという厳しい状況下ながら、無難に走り、2位との差を13分29秒に広げた。一方、342号車も順調な走り、部門5位から4位へと順位を上げた。

第4、第5ステージはメカニックによるアシスタンスが禁止されるマラソンステージ。大きなトラブルは致命的なので、慎重に走行。



ついにトップに立ち、ジボン/ギャルサンのふたりに笑顔がこぼれる。だが2位との差はわずかで安心できない。





1/16

第13ステージ ヴィラ・カルロス・パス→ロサリオ 走行距離699km

### 波乱を乗り越えV! 初の社員ドライバー三浦も完走

第11ステージでピンチを招いたが翌日は2台とも無事に終え、343号車は2位との差を拡大。最終日もそのリードを守りきり、343号車が市販車部門優勝。チームは3連覇を達成した。ドライバーとして初出場の三浦選手も部門5位でゴール。チームは市販車部門3連覇と2台揃っての完走という目標を達成した。



大橋副社長に健闘を称えられ、笑顔のジボン、三浦両ドライバー。



日本から駆けつけたトヨタ自動車内山田竹志会長、トヨタ車体大橋副社長、山崎隆太郎専務役員、須田恭弘常務役員が勝利を祝福。観客からの歓声に全員が応える。

1/14-15

第11ステージ ラ・リオハ→サン・ホアン 走行距離712km

第12ステージ サン・ホアン→ヴィラ・カルロス・パス 走行距離931km

### またもや窮地。暗雲立ち込める事態に



再び招いたピンチにジボンに着いたジボンドライバーは落胆の表情。角谷監督がなぐさめの声をかける。

メカニックの修復後、主催者側による安全面の確認がなされ、翌日の競技参加が認められて優勝への希望が繋がった。メカの活躍なしに今大会は語れない。



前日、部門首位に返り咲いた343号車は慎重に走っていたが、先行するトラックを抜いて追越す際、岩に車両がぶつかり転倒。ゴールはしたが前日築いた2位との57分の差は21分差に。メカニックたちは再び懸命の復旧作業に追われ、大きな局面を迎えた。

1/11-13

第8ステージ サルタ→ベレン 走行距離766km

第9ステージ ベレン→ベレン 走行距離396km

第10ステージ ベレン→ラ・リオハ 走行距離763km

### 連日の猛追劇で驚異的な首位奪回を果たす



逆転優勝を狙う343号車は後半戦最初のステージでトップとの差を39分も短縮。翌日も大幅にタイムを縮め、21分25秒差まで詰め寄った。そして毎年ハイライトとなるフィアンバラ砂漠の第10ステージでついに首位を奪回。342号車も第8ステージで駆動系にダメージを負うピンチを招いたがなんとか切り抜け、2台揃って終盤戦を迎えることとなった。

①トップとの差を大幅に縮め、がっちり握手するジボンドライバーと角谷監督。②一方、快調だった342号車は第8ステージでプロペラシャフトを破損し、前輪のみでの走行を強いられるピンチに。



1/8-9.10

第6ステージ ウユニ→ウユニ 走行距離723km

第7ステージ ウユニ→サルタ 走行距離793km

休息日 サルタ

### 343号車がクラッシュで危機的状況に

部門首位に立った343号車は第6ステージ終盤、丘を登った先に隠れていた溝に落ちて車体を破損。自走が難しく、幸い後から来た342号車に牽引されてゴールに辿り着いた。ランドクルーザーの堅牢性の高さでメカニックの懸命な作業で翌日の競技も続行できたが、トップと1時間38分差の4位と苦境に。それでもなんとか前半戦を終え、後半戦に向けた徹底的な整備を休息日に行った。





# カールを終えての感想

監督やナビゲーターだけでなく、社員が担う領域をさらに拡大  
過酷な戦いでクルマをつくる人を鍛え  
鍛え上げられた人が、もっといいクルマづくりに邁進する

## メカニック&アシスタントクルー

### エンジニア／伊東克巳 Katsumi Itoh

大きなトラブルがありながら走りきったランドクルーザー200シリーズの性能の高さを改めて感じました。ラリーで得られた経験をもっといいランドクルーザーづくりに活かしていきたいです。

トヨタ車体開発部門でプリウス、ノアなどの設計業務を経験し、2015年にラリー車開発専任エンジニアとして加入。ラリーで得た経験をマシンの性能向上はもちろん、市販車両へのフィードバックの橋渡しを担う。



### No.342メカニック／前田勝哉 Katsuya Maeda (福岡トヨタ)

担当した342号車が完走できて良かったです。三浦ドライバーが大事に乗っているのがクルマを触って伝わってきました。前回に比べて雨や寒さなど環境が厳しく、体調管理は難しかったです。

2015年大会でメカニックとしてダカールデビューし、2016年大会は自身2度目の挑戦。ディーラーメカとしての経験を活かした丁寧かつスピーディーな整備力でチームに貢献した。

### No.343メカニック／内裕二 Yuji Uchi (トヨタ自動車)

終盤に343号車が横転したときは、優勝は厳しいと思いました。短い時間で車両の修復ができたのはチームがひとつになって協力した成果だと思います。素晴らしいチームメンバーに恵まれて良かったです。

2015年にメカニックとしてダカールデビューし、2度目の挑戦となった。車両開発業務の経験を活かし、ラリーマシンの製作でも活躍するチーム最年少メカニック。



### No.342メカニック／小田裕介 Yusuke Oda (福岡トヨタ)

初めてのダカールラリーであったという間の2週間でした。整備環境は雨や徹夜など大変ではありましたが、作業を楽しむことができました。

2015年5月、メカニックとしてTLCのメンバーに加わった。国内外でのテストには自ら手を挙げて積極的に参加。ラリーメカニックとしてのスキルを磨き、2016年大会で自身初のダカール挑戦を迎えた。



チーフメカニック  
フィリップ・シャロワ  
Philippe Challoy



Car No.343メカニック  
ニコラ・パティ  
Nicolas Paty



Car No.343メカニック  
パスカル・ブロア  
Pascal Beurois



Car No.342メカニック  
ヘドロ・アンブロシオ  
Oliveira Ambrosio



カミオンクルー  
ミッシェル・ボージョン  
Michel Beaujean



カミオンクルー  
ローラン・ソイエ  
Laurent Sohier



カミオンクルー  
セルジュ・モンセラ  
Serge Monsere



カミオンクルー  
イヴ・ラクロワ  
Yves Lacroix



コーディネーター  
奥地 博之  
Hiroyuki Okuchi



# 2016チーム体制とダ



チーム代表  
**林 正敏**  
Masatoshi Hayashi  
トヨタ車体 常務役員

2012年6月よりチーム代表に就任。「厳しい時こそ明るく、楽しく、元気よく」をモットーにチーム目標である市販車部門優勝に向けてチームを支える。

## チーム監督／ドライバー&ナビゲーター

**ジャン・ピエール・ギャルサン**  
Jean Pierre Garcin

ナビゲーター

**No.343**

ドライバー

**ニコラ・ジボン**  
Nicolas Gibon

大変と同時に連日雨に悩まされる今までにない大会でした。天候の影響でのキャンセルやSS短縮に加え、勝負どころの砂のステージも少ないし。こういったことも含めダカールラリーなんだと思います。

20歳の時より数々のモータースポーツ競技に参戦。技術者として自動車業界に入り、モータースポーツに携わる。ダカールラリーには1997年より参戦し、2000年～2003年にはTLCの前身となるトヨタ・チームアラコで市販車ディーゼル部門4連勝を飾り、チームの勝利に貢献。その後、数々のラリーレイドにナビゲーターやオーガナイザーとして経験を積み、2016年大会でTLCに復帰した。



今年はエースという立場でプレッシャーもありましたが、勝つことができ、ほっとしています。もちろん342号車やメカニックの支えがなければ自分はこのポジションにいませんでした。皆に感謝しています。

ダカールラリー初出場は2002年、トヨタランドクルーザーブレードでエントリー。2006年からはクロスカンントリーラリー専用のキットカー(BOWLER)で参戦。2007年大会ではBOWLER部門および、アマチュアクラスでの優勝を取めた。2009年大会でTLCに加入し、部門優勝を達成。その後、一度チームを去るも、2013年大会より再びチームに戻り、チームの勝利に大きく貢献した。

今回342号車に社員ドライバーの初完走という目標を掲げたことで、市販車部門3連覇のプレッシャーは343号車に集中。なんでもない初日にコースアウトしたり、必要がないところで熱くなったりと、序盤からその影響は感じていました。でもストレスなく実力を発揮すれば結果が出ることは分かっていたので、彼らを信頼して細かいことは言いませんでした。

色々ありましたが、ロサリオのゴールセレモニーでジボンが登壇する直前、自分がボディウムの上から小さく拳を挙げたら彼も同じように応えてくれた。そのとき気持ちは通じていたんだと、改めて感じて嬉しかったです。一番大変だったのはやはり343号車が転倒した11ステージ。ピバークへの到着は遅く、

ダメージも大きかったので不安でしたが、誰が指示することもなく自然にみんなが動いて粛々と修復作業を進めていく。そして朝には何もなかったようにスタート。ひとりひとり

の能力の高さと同時にチームの底力を感じた瞬間でした。一方、三浦は個人の欲ではなく、完走という自分の役割を理解して最後まで走り切ってくれた。最初は緊張していましたが、だんだん気持ちの余裕が見えてきて順位も安定。成長したと思います。自分自身は前回もそうでしたがゴールは安堵の一言。無事終わってほっとした気持ちが一番大きかったです。



## チームの能力の高さと底力が優勝を呼んだ

チーム監督 **角谷 裕司** Yuji Kakutani

2014年チーム監督に就任。トヨタ車体のハンドボールチームで選手として活躍し、全日本代表として世界選手権にも出場。世界で戦った経験を活かし、前例に捉われないチャレンジングな姿勢でチームを優勝に導く。

**三浦 昂**  
Akira Miura

ドライバー

**No.342**

ナビゲーター

**ローラン・リシトロイシター**  
Laurent Lichtleuchter

初めて社員ドライバーとして出場し、完走ができてダブルでうれしいです。社員ドライバーの育成として与えられた期間はわずか1年でしたが、自分が走るために本当に多くの人たちが協力してくれました。改めてお礼を言いたいと思います。

2005年トヨタ車体に入社し、2006年の社員ナビ選考にて候補に選抜。2007年にナビとして、ダカールラリー市販車部門デビューウインを果たし、以降2015年まで、社員ナビとして計6回のダカールラリーに参戦し、2度の部門優勝を取めた。2015年大会後はTLC初の挑戦となる社員ドライバー育成プログラムに取り組み、2016年大会でドライバーデビューを果たした。



ゴールに無事着いてハッピーです。343号車の優勝にも(トラブル時に牽引するなど)貢献できた部分もあるので満足です。三浦ドライバーも丁寧な運転でだんだん上手くなっていました。

2015年までTLCに在籍したナビゲーター、アラン・ゲネック氏の強い推薦を受けてチームに加入。TLCでの社員ドライバーデビューに向けた取り組みに意欲を示し、三浦のドライバートレーニングにも参加。国を問わず、様々なチームからナビゲーター、メカニックとしてクロスカンントリーラリーに参戦した豊富な経験を武器に、2016年大会では三浦とのコンビで市販車部門に挑んだ。



# 過酷なラリーを闘う ランドクルーザー

ベースは市販のランドクルーザー200であり  
ラリーを戦うために認められた  
改造範囲は限られているものの  
さまざまな装備や強化、工夫がされている



TLCのランドクルーザー200シリーズは今年大会に向けてカラーリングを一新。会社創立70周年を記念し、トヨタ車体のコアコンセプトカラーであるブルーを基調とする精神なグラフィックを採用した。年々車両の性能向上に努め、今大会に向けてもロールケージ取り付け部の形状見直しで車体剛性の向上を図った。また年々ハイスピード化するラリーの傾向にあわせ、サスペンションを改良し路面追従性を高めたほか、配線類の水密性を高める対策など細部にも目を配っている。1輪

あたり2本のショックアブソーバーを配し、アームを強化したサスペンションや下回りのガード類を搭載。室内にはロールケージのほか長距離を無給油で走破するための大容量燃料タンク、ナビゲーション機器などを備える。市販車部門ではこうした安全装備や競技で最低限必要な機器搭載の他は改造を厳しく制限しており、ラリー期間中はエンジンはもちろん駆動系主要部品の交換も禁止。ベースの市販車の素性がラリーの成績を大きく左右することが市販車部門の特徴となっている。

## SPECIFICATION

ベース車両型式	VDJ200
エンジン型式	1VD-FTV型
総排気量	4,461cc
全長/全幅/全高	4,950mm/1,910mm/1,970mm
最高出力/回転数	180kw(245ps)/3,800rpm
最大トルク/回転数	726N・m(74kgf・m)/1,200~3,600rpm
サスペンション	前:ダブルウィッシュボーン式独立懸架コイルスプリング 後:トレーリングリンク車軸式コイルスプリング
ショックアブソーバー	リザーバータンク付単筒ガス式
ブレーキ	前後ベンチレーテッドディスク
トランスミッション	5速マニュアルトランスミッション
タイヤサイズ	285/70R17
ホイール	マグネシウム鍛造17インチ×7.5J
駆動方式	4輪駆動(フルタイム4WD)

## GPS



ナビゲーション機器として助手席にはGPSとトリップメーターを装着。ナビゲーターはルートマップの情報と計器の情報を確認して、ドライバーに指示を出す。

## ロールケージ



室内に張り巡らされたパイプは、車体剛性と転倒時の乗員保護を高めるために装備しているもの。窓のネットは横転時などに乗員の体が外に出ないようにするため。

## ラゲッジルーム



荷室には最大3本のスペアタイヤを積み、スペアパーツや工具、悪路や砂地でスタックした際に使うスコップなどを装備。



## 車両装備

### コイルスプリング／中央発條



別体式リザーバータンク付アブソーバーは高温下でも高い減衰力と対砂塵性を持ち、卓越した性能と信頼性を誇るコイルスプリングと合わせ、優れた操縦安定性と乗り心地で過酷な走りをサポートする。

### ショックアブソーバー／KYB

### フロントサスペンションアッパーサポート／トピア



路面の衝撃を吸収するサスペンションの取り付け部には、高い精密加工技術で作られたスペシャルパーツが使われ、厳しい条件下での走りを支えている。

### ブレーキパッド／エンドレスアドバンス



長距離を走行するため、多くの燃料を積んで重くなるマシン。さらに砂、土、泥、岩など多様な路面や急斜面で高い制動力と耐熱性が必要なブレーキは、チームとともに開発した専用のパッドが使用される。

### ホイール／エンケイ



過酷な路面状況を走破する高い耐久性を備えながら軽量化も図った専用のマグネシウム鍛造ホイール。タイヤの空気圧を落としたときにリム落ちしにくいような工夫もされている。

### エンジンオイル(油脂類)／MOTUL



大排気量車に最適なエンジンオイルをはじめ、ミッション・トランスファー・デフ用オイル、ブレーキフルード、エンジン用クーラントなど、高温で負荷の大きな状況でも性能を発揮する。

## 室内装備

### シートベルト／タカタ



両肩、腰、腿をベルトで締めてバックルで留めるフルハーネスという競技用のシートベルトが使われる。激しい揺れや横転の際にしっかりと体をホールドし、しなやかな素材で体への負担も軽い。

### シート／野口装美



激しい走行でも体をしっかりと支え、最良のポジションとなるよう各乗員の体型に合わせてシートクッションで調整。さらにシート後方には同社製作のキャメルバッグ用の保冷バッグが装備され、暑い車内での水分補給に役立っている。



### ベンチレータ

室内の換気を行うための通気口。

### シュノーケル

砂塵などの吸入によるトラブル防止のための吸気口。



## ドライバー装備

### ヘルメット／アライヘルメット



ラリーでは車両の横転も珍しくないため、乗員の頭部を守る重要な必須アイテム。灼熱の砂漠の暑さの中でも快適に過ごせるよう通気性に優れ、内装も交換しやすいようになっているほか、激しい走行でもブレないようフィット感を高めた形状としている。

### 腕時計／カシオ計算機



衝撃、遠心力、振動に強いTRIPLE G RESIST構造を持つ強靱な腕時計G-SHOCK。素早い方位計測機能は緊急時に目標方向のナビゲートを支援する。傷に強いサファイアガラスと大型のフェイスの採用で視認性も高い。

### レーシングスーツ／PEF



レーシングスーツはイタリアのサベルト社製。競技中の車内は50℃以上になることもあるため、通気性の良い生地を使ったものをオーダーしている。また、アンダーウェアやTシャツ、サロペット（メカニックの作業着）も機能性を考えたものを使っている。

## チーム用品

### キャンプ用品／モンベル



ダカールラリーの競技期間中の基本生活はキャンプ。TLCが使うテントや寝袋、エアマットは、登山や極地遠征での実績を誇り、実用性に富んだ対策がなされている。特に2週間にも及ぶ野外生活で、少しでも疲労を軽減し、快適な睡眠をサポートしている。

### チームウェア／モンベル



突然の雨や砂漠の砂嵐、高低差による寒暖差など、ダカールラリーでは天候がめまぐるしく変わる。そうした状況に対応できるウェアは必須のアイテム。中でも雨は頻繁に見舞われ、登山やアウトドアで実績のある機能性に優れたレインウェアが威力を発揮する。

### チームウェア／TBユニファッション



チーム公式ウェアとして使用されるピットシャツ。機能性を考えて細部までこだわった作りとデザインとなっている。また、チームキャップは強い日差しを受けるダカールラリーでは光や熱を避け、防寒、防砂などにも役立つアイテムとしてさまざまな場面で活躍。

### 工具／峰澤鋼機



車両の整備に使用し、トラブル時の対応用に車両にも搭載する各種の自動車用工具。タイヤ交換のネジ締め用にマキタ製の電動インパクトレンチやドイツ・スタビレー社の工具を使用している。いずれも機能性と信頼性に優れ、評価も高い。

### ノートパソコン／NEC



厳しいダカールラリーの環境下でも使用に耐えるものが必要となるノートパソコン。ShieldPROは水や塵の進入を防ぐ防滴／防塵設計で、砂塵が舞うダカールラリーでも問題なく稼働。競技中のデータ管理、作戦立案のほか、ラリー車両の開発にも使用されている。



## 食品

### 機能性栄養食品／大塚ウエルネスベンディング



長く熱い戦いのダカールラリーでは体力の消耗も激しく、走行中でも水分や栄養の補給が必要。そこで、汗で失われた水分／イオンをすばやく補給するスポーツドリンクや、短時間で簡単に栄養補給ができる機能性栄養食品が激しい戦いを支えている。

### インスタント食品(日本食)／シマツ



日本人スタッフにとっては何よりの力の素となる日本食。米やもちといった炭水化物はエネルギー源となるため、日本人以外のスタッフにも好まれている。携行食として便利な缶詰や味噌汁なども用意され、チームの力強い味方となっている。



さらに

# 環境に配慮した バイオディーゼル 燃料での挑戦

2011年以降、TLCはBDFを100%使用  
代替エネルギーを使用したクルマの部門で  
6年連続の優勝を果たした



TLCは環境に配慮し、長年にわたり廃食油から精製したバイオディーゼル燃料（BDF）を使用している。BDFの原料となる廃食油は、チムを日ごろからサポートしていただいているスポンサー企業様や近隣の小学校・高校をはじめとする地域の皆さま、ならびに従業員など、たくさんの方々に協力いただき、太田油脂（株）様のご協力を得て約8750ℓもの廃食油からBDFを精製する。また、今回から（株）デンソーの藻油から精製したBDFも加えることで、環境技術の発展と循環型社会の仕組みの広がりへ貢献している。



刈谷市立富士松中学校で  
生徒が集めたBDFを用いて  
ラリー車デモンストレーション走行

トヨタ車体富士松工場近くにある富士松中学校で1年生約200人を対象に廃食油提供のお礼と環境意識をより高めてもらうため、特別に校庭でラリー車によるデモンストレーション走行を披露。生徒の皆さんに歓声と笑顔が広がった。

## ご協力ありがとうございました!



# 新しい道が開けた!

## 初の社員ドライバー、三浦昂が挑んだ ダカールラリーの第一歩

社員ドライバーを起用することを決めたTLC  
その初の挑戦者に選ばれたのは三浦昂  
これまでナビを務めてきた経歴を持つが  
新たな立場で戦うことになったプロセスを聞いた



「どういうきっかけで社員ドライバーになったのでしょうか？」

「レーシングドライバーは子供のころのあこがれで、トヨタ車体に入ってダカールラリーのナビゲーターに起用されてからもそれは変わりませんでした。2015年大会が終わって会社が新しいことをやってみようということになり、自分にドライバーをやらせてほしいと手を挙げたのが直接のきっかけです」

——大会までにどんな準備をしたのでしょうか？」

「今年の大会に向けてチームの方向性が決まったのが2015年3月。実戦テストとして参戦する10月のモロッコラリーにドライバーとして出場し、その結果で採用を判断するというので、力をつけるにはとにかく時間が足りない。社内外の助けてくれそうな人に頼みこんで時間の作れる限り運転のトレーニングを重ねてきました。全日本ラリーにもナビゲーターとして出場し、できることはなんでもやりました」

——ナビの経験がドライバーとなって役立つことはありますか？」

「これまで優勝経験をもつドライバーの横に何度も乗せてもらってきました。路面状況に対してこのクルマがどれぐらい走るはずといった感覚、ナビが読み上げるコース情報を現実と結びつける部分などには経験が活かしたいと思います」

——競技中で大変だったことは？」

「初日のSSスタート時は足が震え、路面の感覚が分からないほど緊張しましたが、じきに落ち着きました。苦しかったのはニコラ（ジボン）が横転した終盤の11ステージです。応急措置を一緒に施したあと、彼らはもうレースのペースでは走れないので自分たちが先行。ところが今度はこちらがトラップで停まってしまう。原因は分からずゴールできなければリタイアのピンチです。追いついてき

たニコラは自分たちがけん引すると言う。でも、これ以上彼らが遅れたら残り2日間での再逆転は難しくなる。話し合った未彼らには先に行ってもらうことに。その後我々も運よく他の競技車に引っ張ってもらってSS（競技区間）を抜け、事なきを得たのですが、今考えるとあのときが精神的に一番厳しかったです」



「ドライバーになりたいという子供のころからの夢が実現するとは、やりたいことを思い続けることの大切さを改めて感じました」と三浦ドライバー。

——完走を果たしてどう思いましたか？」

「一番大きな喜びを感じたのは最終SSのゴールが見えたときです。そしてゴールすると会社のひとをはじめとする沢山の方々からメールや電話を頂いてすごく嬉しかった。トレーニングのサポートや応援をしてくれた人たちには一緒に戦ったという実感があり、社員が挑戦する意味があったんだと思います」

——今後の目標を聞かせてください。

「今回の経験を通じて自分の苦手な部分、他のドライバーと力の差がある部分に分かりました。克服は簡単なことではないですが、いつかは社員でもダカールラリーを完走できるだけではなく、勝てることを見せたい。次のチャンスがあればより上位を目指して頑張りたいと思います」

これまでジボンドライバーのナビを5度務めたこともあり、三浦ドライバーにとっては手本となる身近で心強い存在。



343号車をサポートし、チームの優勝にも大きく貢献。そして自らも初挑戦で初完走と見事な結果を残した。



# 見せた、 TLCの底力

獅子奮迅の活躍で優勝を支えたメカニック



小田裕介  
(福岡トヨタ)

前田勝哉  
(福岡トヨタ)

内 裕二  
(トヨタ自動車)

今大会、チームは再三のピンチに見舞われリタイアかと思われる場面があったがメカニックの懸命な作業で競技に復帰。彼らの働きがなければ優勝はなかった。

——今年の大会はチームにもメカニックにとっても大変な戦いでしたね。内：今回で言うとウユニから中間休息日のサルタへ1000kmの大移動中、道路が洪水で5時間足止めされたんです。ウユニではクラッシュした343号車の車両を朝までかかって修復してすぐに出発。サルタ到着は翌日の朝6時でした。2日間徹夜のまま休息日の整備に入ったので正直体的にきつかったです。

前田：342号車の担当だった自分たちはサルタへ先に出発したのでよく寝かせてもらいましたが…。標高3500mのウユニの寒さや砂嵐、土砂降りの中で作業したフイとか今回は環境面が厳しかったですね。小田：作業面で一番大変だったのはやはり343号車が横転して帰ってきた11ステージのビバークでした。作業は朝7時まで掛かって辛かったけれどスタートしていくマシンの姿には一番感動したし、やってやったぞという達成感があった。クルマを送り出したあとみんなが良い顔をして



前田メカニックは、参加2年目の成長した力を十分に発揮。それでも過酷な状況下におけるトラブルの原因究明の難しさを改めて感じた。

ていたのを覚えています。



ダカールラリー初挑戦の小田メカニックは、342号車担当。大変なこともいろいろあったが、厳しい戦いの中で吸収することはもっと多かった。

——そのときのチームの様子は？

内：ダメージを見たときスタートに間に合うかなと不安に思ってたんです。でも作業に入ったらカミオンのクルーをはじめメンバーみんなが手伝ってくれた。それを見て「大丈夫、行ける」と思いました。

小田：ニコラ（パティ）とパスカルのベテランメカ2人が343号車を担当しているのですが、彼らのボディ修復技術には正直圧倒されました。隔々の骨格構造まで頭に入っているんだと思う。ディーラーでの仕事と大きく違うのは限られた時間内での完成度です。ラリーの現場ではスピードと正確さが勝負。大事なのは競技を問題なく続けることで、故障修理ではない。改めてそのことを実感しました。

前田：あの日は342号車もトラブルが発生していて、緊急の連絡が入ったんです。でも原因を特定しようにも衛星電話の電波が途切れ途切れで状況が分からない。様々な情報が

錯綜して原因を絞り込めず、焦りました。ダカールの過酷な状況でのトラブルシュート（原因説明）は本当に難しい。

——戦いを終えてどうですか？

内：みんなが徹夜で修復した343号車が優勝できて嬉しい。あの時あきらめずに最後までやって良かったです。自分にとって2年目の今回はニコラとパスカルから任せられる部分も増え、少しは成長できたかと思いました。

小田：初めてのダカールはあつという間でした。次回に向けて力を入れたいのは電気系のトラブルシュート力を向上させること。体力面もそうですが、勉強してフランス人よりも先にトラブルを解決できるメカニックになりたいです。

前田：自分も今回が2年目。チームの目標が達成でき、素晴らしい経験になりました。ラリー中はきついと感でも思い起こすとまた行きたくなる。チャンスがあれば担当車両のチームメカをやってみたいです。



ジボン／ギャルサン組の343号車を担当した内メカニックは、フランス人メカニックから任せられる仕事も増え、前年度よりも貢献度が上がった。



チームの役割の垣根をこえ、まさにチーム一丸となったTLCの結束力の強さが、勝利へと結びついた。





# ダカールラリー2016に向けた 1年間のプロジェクト

厳しい戦いが終わったのもつかの間  
すぐに翌年の大会に向けての準備が始まる  
経験のあるメンバーも、新たに加わったメンバーも  
同じ目標に向かって、研鑽を積んでいく



6月

## モロッコテスト

### ダカール2016へ向け本格的活動

ダカールラリー2016へむけていよいよ本格的活動を開始。このテストの目的は、車両改良点のチェックやトラブルシューティング、新メンバーでのコンビネーション確認、メカニックのスキルアップなどで、ダカールラリーへ万全で挑むためのスタートとなる。12日間にわたりさまざまな路面でテストし、特に砂丘での走行に重点を置いた。

ドライバーとナビゲーターの組み合わせのテストを行ったほか、メカニックも走行を体験し、ラリー車の理解を深めた。



新しいメンバー、新しい体制での顔合わせ。半年先の大会に向けて、いよいよ本格的なスタートが切られた。



10月

## モロッコラリー



三浦ドライバーは市販車部門優勝という結果を残し、初の社員ドライバーとしてダカールラリー2016への出場を決定つけた。



ダカールに向けた実戦ラリーでも大きな問題は見当たらず。3連覇に向けてチームの準備は順調。



息のあったコンビネーションをみせたジボン/ギャルサンの二人。

### 2台揃ってトラブルなく、本戦へ手応え

多くのチームがダカールラリーに向けた実戦テストとして参加。10月5日～9日にかけて行われ（走行距離2,255km、競技区間1,358km）、2台とも大きなトラブルはなく、好成績でゴール。新メンバーはチームに溶け込んで結束力が強まり、新メカニックも初めての実戦経験を積んだ。



11月

## シェイクダウン

## ラリー車の最終確認も問題なし。高まる緊張感



高低差があり、高速から低速までバリエーションに富むコースでテスト走行を行った。

フランス中部マルマーニュ地方のオフロードコースで、新たなカラーリングで完成したダカール本番車の挙動や不具合のチェックをするために50kmほどのテスト走行を実施した。大会に参加する日仏のメンバー全員が参加し、すべてのメニューを無事にこなして終了。チームはダカールラリー2016に向け士気が高まり、市販車部門3連覇という目標を改めて強く意識するシェイクダウンとなった。



うねりのあるコースを高速でジャンプ！ゼッケンこそないが実戦さながらの走行。

12月

## 参戦発表会

## 新たなチャレンジを表明



新体制のメンバーを発表し、ダカールラリー2016へ向けて健闘を誓った。



発表会の冒頭で挨拶に立つ岩瀬社長。

12月7日、愛知県豊田市のさなげアドベンチャーフィールドで、ダカールラリー2016参戦発表会を実施した。会場には大勢の報道関係者が集まり、挨拶に立った岩瀬隆広社長は、創立70周年を迎えた節目を機に新しいチャレンジをスタートさせることを表明。初の社員ドライバーの起用をはじめ、新体制のメンバーを披露し、3連覇に向け決意を新たにした。

12月

## 参戦壮行会



勝運ダルマの目入れを行った綱岡会長(右)。角谷監督は力強く健闘を誓った(左)。



吉原工場の米澤工場長と各部代表の方から激励メッセージとエールをいただいた。

## たくさんの熱い声援を胸に、いざダカールへ

12月14日、ランドクルーザー200シリーズを生産するトヨタ車体吉原工場体育館にてTLCのダカールラリー2016参戦壮行会が開催され、TLCの市販車部門3連覇を祈念し、トヨタ車体社員や関係者約500名が集まり、チームメンバーは熱い激励を受けた。綱岡会長による勝運ダルマの目入れや、寄せ書きをした応援旗の贈呈、激励のエールなどが行われ、TLCは熱い応援に感謝すると共に3連覇に向け気持ちをひとつにした。

勝利への強い気持ちを込めて参加者全員でVの形に並んで集合写真。掲げた3本の指はもちろん3連覇！まさに心はひとつ。この力強い応援がチームの大きな原動力になる。



TEAM LAND CRUISER  
TOYOTA AUTO BODY  
ダカールラリー2016参戦TLC壮行会  
2015年12月14日 吉原工場体育館





# DAKAR RALLY 2016

ARGENTINA~BOLIVIA

## TLCの活動を支援していただいたスポンサー企業様 ご支援・ご声援ありがとうございました

トヨタ自動車株式会社	株式会社榎屋	豊田通商株式会社	東海興業株式会社
株式会社デンソー	株式会社江口蔵商店	関西イベント株式会社	アルゼンチントヨタ株式会社
日本イベント・オートモーティブコーティングス株式会社	し崎総業株式会社	株式会社小糸製作所	株式会社ニコー
豊臣機工株式会社	中央電気工事株式会社	株式会社TDC	豊精密工業株式会社
KYB株式会社	中央発條株式会社	株式会社トピア	トリシティ工業株式会社
川崎設備工業株式会社	株式会社きんでん	林テレンプ株式会社	株式会社大林組
あいおいニッセイ同和損害保険株式会社	丸高株式会社	株式会社イノアックコーポレーション	小野電気株式会社
株式会社中外	新和薬品株式会社	株式会社豊田自動織機	三井住友海上火災保険株式会社
アスモ株式会社	住友商事株式会社	トヨタ紡織株式会社	株式会社ジェイテクト
アイシン精機株式会社	石原商事株式会社	豊田合成株式会社	株式会社アベックス
清水建設株式会社	愛知トヨタ自動車株式会社	トヨタホーム株式会社	白月工業株式会社
株式会社魚国総本社	サントリービバレッジサービス株式会社	住友電気工業株式会社	住友理工株式会社
タケショウ株式会社	東京海上日動火災保険株式会社	三岐通運株式会社	株式会社東海特装車
古河電気工業株式会社	株式会社ジェータックス	トヨタ車体精工株式会社	カリツー株式会社
岐阜車体工業株式会社	シロキ工業株式会社	高砂熱学工業株式会社	TABMEC株式会社
株式会社東郷製作所	日東工業株式会社	株式会社アウトソーシング	エームサービス株式会社
ビューテック株式会社	株式会社クリモト	株式会社メイドー	東海部品工業株式会社
株式会社杉浦製作所	株式会社トヨタ車体研究所	株式会社三五	中川産業株式会社
ベルートヨタ	愛知製鋼株式会社	株式会社青山製作所	株式会社アドヴィックス
エース産業株式会社	株式会社中部リユース	トヨタファイナンス株式会社	ニューライトサービス株式会社
富士ゼロックス株式会社	株式会社ワイテック	株式会社アーク	Man to Man 株式会社
株式会社東海理化電機製作所	株式会社大気社	太平洋工業株式会社	峰澤鋼機株式会社
イイダ産業株式会社	福岡トヨタ自動車株式会社	MOTUL	アイシン・エアアイ株式会社
株式会社モンベル	カシオ計算機株式会社	TBユニファッション株式会社	有限会社野口装美
タカタ株式会社	株式会社PEF	株式会社アライヘルメット	シマツ株式会社
株式会社エンドレスアドバンス	大塚ウエルネスベンディング株式会社	エンケイ株式会社	NEC



発行/トヨタ車体株式会社 総務部 広報室  
http://www.toyota-body.co.jp  
禁無断転載

チームランドクルーザー

検索

TLCの活動や映像など、さまざまな情報を発信

